

## 第二回 名田庄多聞の会

「原発のある町の人たちから聞いたこと」

早川 みなさんこんばんは。今日は第二回多聞の会です。話題はそこにあるように原発のある町の人たちから聞いたことです。お一人に来て頂きました。八木さんが今日の話題提供者です。北村先生は八木さんの指導教育、共同研究の長です。

八木 大阪大学の八木です。今日は「原発のある町の人たちから聞いたこと」とお話をいただきましたが、私自身は原子力の専門家ではなく、大学では心理学を勉強してしました。

心理学の中でも、夢の判断とか、人の話を聞くカウンセリングとか、人の気持ちをとどう考えるとかについてと少し違うことをしていました。原子力も含めていろんな事故が起ります。最近の例で言えばJR福知山線の事故がありました。ああいう事故が起るとき、ルートはあるのに人はなぜ決められた速度以上のものを走らせてしまったのか、とどういったことが問題になる。あのかのテレビで言われていたように、非常に過密な競争があつて、JRは阪神電鉄に負けられないとか、その他いろいろいわれてしまいましたが、事故が起るときにはその背後にいろんな、人が絡む要因や原因があるので、そのようなことを大学では勉強したり研究したりしてました。

そこについて勉強をしていくとき、なぜ事故が起るのかが、なぜ安全な状態が起るのか、とどういったことを考えるとき、原子力が一つのテーマとして出てきました。

私は一九九五年が大学を卒業した年ですが、ちょうど「もんじゅ」の事故が起

じた年でした（もんじゅ事故は一九九五年十二月八日）。

北村先生はもともと東北大学工学部の原子核工学科に勤務で、いわゆる原子力を一番専門にやっておられる先生です。私は学生のころから先生を存じ上げていました。私と北村先生と北村先生のごころの助教授の方と、青森県の六ヶ所村、ここには原子力発電所からでた放射性廃棄物を処理する施設がありますが、それともう一箇所、宮城県の女川町、ここには原子力発電所があります。が、これらの地域に行つてそこに住んでいらつてやる方と対話する、話をする、そのようなことを二四年くらいやっています。

今の仕事を始めたきっかけ

なぜそういうことを始めたかをお話したいのですが。

私は事故とつてものはなぜ起るのか、とどういったことをやつていて、原子力のことをすこし聞きかじつてたというのが正直なところです。一九九九年にJCO事故とつて非常に大きな原子力の事故があつて、作業員の方がおなくなりになったり、住民が避難したりということがありました。

私は原子力に反対したり賛成したりとつてはなにとつのが正直なところです。原子力工学科の知り合いとか、電力会社の知り合いがいるのですが、あの事故の後に、世の中で原子力の専門家がけつこく信頼されてない、彼らは信用できない、とつていわれていくな、とつて実感がありません。その一方で現場で働いている人たちが悩んでいるのも、はね聞いていました。悩んでいるから事故を起つていってしまうのでは決まっています。私と同年代の人たちが安全にすこし関わつていこうか、そのよをすこく真剣に、毎日ついたらどうしようかと

徹夜してもがんばっている人がいるのを知っていた。原子力を安全にやるつもりでいる人と、原子力へのなにも思っていない人との間がとてつもないと思っていた。実感としてこのようなことが当時ありました。

今私は大学にいますが、大学に行く前は東京で防災を考える民間の会社、研究所のような会社に勤めていました。そのとき、原子力だけでなく地震や風水害のよつな自然災害が起ったというのに行つて調査をしていましたが、ちょうど二〇〇〇年の三月に北海道の有珠山で大きな噴火災害があつた。そのとき現地に入つて聞いたことでも印象的なことがあつて、私はいつも自己紹介するときに言つのですが、有珠山には北海道大学の観測場があつて、いつもそこで観測している北大の先生がいろいろしゃる。有珠山の噴火はちょっと特殊で、有珠山が大きく噴火してないときに、避難して下さいという指示があつた。

避難指示は、実際過去の自然災害をいろいろ見ていると、地元の人たちにとつてとても困ることが多いのです。なぜかといつて、商売している人は商売ができなくなる。水産業で養殖をされている人は魚に餌をやれなくなる。そういうことがあります。避難することは安全を守る上では重要なことだが地元にとつてはけっこう難しい状況になります。

そのときは北海道大学の先生が避難しなさいといつて避難することになつて、実際に噴火したのですが、もし避難しなさいと言われて避難したが噴火しなかつた場合どう思ひますかと、地元の人に聞いたことがあつたのです。

そのときに言われたのは、北大の岡田先生がすごくがんばっているのを僕たちは知つている。先生は一年三六五日山の状況を見て、住んでいる人が何か訊きに行つたら丁寧に答えてくれるし、子供達が社会見学に行つてもすごく丁寧に答えてくれる。そういうのを見て、あんなにがんばっている先生が噴

火すると言つて噴火しなかつたらしょうがない」

「しょうがないといつては、あたつていない、あたつていない、あるいは、い無いといつてはなくて、あんなにがんばっている先生が言つたのだから、しょうがないといつていいです。そのとき、ああ原子力の専門家には、いつていがないといつていいです。」

言葉として、信頼されてないとか信用されてないとか言われますが、うまく言えないけれど、そういうことでなく、「しょうがない」といわれるような、もちろん原子力の場合、起つたときしょうがないとはいわないと思ひますが、人々に見せている音中がないとそんなふうに感じました。

それではそれをどんなふうに始めればいいのかと考へ始めたときに、私が北村先生に、やりましようやりますよといひ先生は、やはり現地に行つて話さなければならぬといふことと、それから始まつたわけです。北村先生、補足があつたら補足して下さい。

北村 原子力の人、日本中賛成反対いろんな人がいて、その間でもな対談が成り立っていないではないですか。いろんな意見はあつていいのです。意見が異なるのは当たり前なのです。それがなぜ、憎しみあつたよつな怒鳴りあひの場はあるのに本当に話し合つ場はないのかと思ひました。

もう一つは、八木さんの場合はなんとかならないかと思ひましたが、私の場合は三十何年原子力をやってきて、国立大学ですから税金でやらせてもらつて、今の言葉で言えば、説明責任、もつての問題について語らないでよろしかったのでしょうか、といつたがある。一九九一年に美浜二号の事故があつて、九五年の「もんじゅ」があつて、九七年には動燃のアムアルト固化での火災事故、九九年の二〇〇事故で、いつて本当に人がくなくなつてしまつた。その間ずっと沈黙し

ていぶん自分とていずちやていげない領域に来てていぬと思つた。こゝろに黙つていぼけなごと思つていなりました。

だから、たまたまなだけれど、八木さんも僕も何とかしなければと思つた。実は八木さんをわれわれが開いた小さな市民公開講演会の講師に招いた。その後、やり始めましていつて始めてのがこれまでの経歴です。それは二〇〇一年の五月のことだ。

### 地元での話し合い

八木先生は東北大学にいらつたので、まずは地元である女川の発電所が大事だといつて始めたのですが、話し合つていしても来て下さる地元の人を捜すのが最初とても難しかった。原子力について話し合ひましていつと、広報誌なりラジオで宣伝してもらつても、それで来てもらえなつたといは容易に想像がついた。それで最初は電力会社にお願ひしようかといつ話はあつたが、電力さんに頼めば出てくる人は、少なくとも否定的な方は出ていられないだらうと思つた。女川には「河北新報」といふ地元の新聞があるのですが、その新聞記事の中から、誰か女川でしゃべつてくれる人がいないかと探してある一人の方にたどり着いたので、その人のいふことについていつことをやりたのですが、いつて行つた。

女川の場合、地元にくつつかのグループがあつて、その中に、町の地域活性化を考ふる二つの大きなグループがあつて、それらは水産加工の人たちだったり、本屋さん、役場の方、喫茶店のマスターなど職業の種類としてはいろいろでした。議員さんも加わつて最初立ち上げました。

最初の打ち合わせが二〇〇二年の五月で、その年の八月の段階で二〇〇二年の九月に最初の話し合ひを持つていふことになつてた。それまで一回目はいふのよつにしましていつかと代表の方と話しして、まずはちうから自己紹介も含めて何をやりたいか説明しますといつことになつてたのですが、二〇〇二年八月二十九日は東京電力のデータ捏造問題が発覚した日でした。

ちうつて私達が会合を持つていふを決めていたのが九月六日だったので、捏造問題が発覚してから一週間しかなくて、しかし、予め考えて準備して資料もいづは作つたし、それは当然東電問題とは別のことなのですが、どうしようとなつた。しかし、この東電問題を話し合ひないわけにはいかないと、私と北村先生と助教の方で話し合ひました。

難しかったのは私達のいふことは新聞報道しか資料がなく、実は東京電力から最初の正式の報告書が出たのは九月十七日なので、この段階では私達も報道で言われている以上のことは何も分からなかつた。かつ、けつていふ難しかったのは東京電力の問題だつたことです。女川の発電所も問題となつた東京電力の発電所と同じ型のBWR型だったので、それでは女川ではいふのですかとときと聞かれる。そうなるも最初からいふかちうかとも、そんなことを話しして、何もいふらには資料がないのだから。

しかし、それは避けることはできない。このとき、最初から三時間が四時間、すーと東電問題を話して、議論がいろいろ紛糾したのが事実です。私が可会をして北村先生が専門家として説明されていふのですが、なかなか厳しいいふがあつたといふも思ひます。

北村、そつです、ね、私自身は業界の凶側にいるから、何となく分かるよつに思つていふはいづかあるのだけれど、地域で訊かれたら、それこそ、怒りのオーラ





北村 僕はあいつの「罪」で楽天的になれるのかなと思いません。知らないのが反対している。知れば賛成するところかと思ってしまう。なぜか楽天的なのが。原子力関係の人たちはそう思っているから今でもいい情報は出している。原子力はお金を使って広報するばかりで無駄なことをしている。八木さんには言われていた。八木さんは体感的に分かっていたのでしょ。私は当事者の苦い体感として分かってきた。それはぜひぜひ勘違いですよ。

八木 いまの原子力の情報の出し方は、大量にドカーンと渡している。それに対して聞いている人は、たまに質問しようかなとして訊く。これをモニターシオンと呼んでいるところがある。だいたい一気に入分以上も説明されると眠くなるか聞く気が起らないくなる。もっと小刻みに「これはどうしてこうなっていますか」というのを、とどろくようにやっていると、普通は理解出来ない。

よく言えば、原子力の専門家の人はまじめなので、ちゃんと説明しなければならぬと思いつて説明されているのでしょ。それが伝わらないだけで全く違う伝わり方をする。

何か質問が来ます。その時の専門家は「返答なり説明をされるのです。質問をされては、それが分からぬところがある。例えば、普通の時にはあなたの説明は、どうしてこうですかと確かめたりしますね。それがなくして、あなたが言う言葉を、自分の知っている言葉を「答える」。それを訊いて、ああ、質問と答えては、どうも思いつく。そんなとき、専門家の人はどうしてどうするか、訊けばどうも思いつく。例えば地名をなにかで分からぬところもある。なのを知りたければならぬと思いつくのが訊かない。

中川 そうです。

もう一つ、中立という言葉を聞いておもしろいと思いました。最初に女川に行き始めたときに感じたことですが、地元の人には「これはどうもそうだと思うますが、それが賛成派の会合なのか反対派の会合なのか考える。それはどうだろつなどは私達も分かっていた。

それで、最初に何をか言ったかという、私達は賛成でも反対でもありません。中立です」と最初に言っていた。それは信念として言うなければいけないと思いつ始めたことでした。

女川で五回も六回もやって「しゃべりやすくなくて言われた」と八木さん、あなたは中立という言葉を、それはどうして。もし北村先生が本音で中立と原子力のことを言っておられるのなら、俺、原子力はいいな」と。

それはどうしてかという、その方は魚の加工業者で、その方が言われたことは、俺は俺の魚が一番おいしく思っている。ものを作るといふことは、その魚をどうして、みんなにおいしく食べさせたいと思いつているから、いいものが作れる。安全なものを作れる。作っているものに誇りがある。原子力の人、言う中立という、それは何よ、原子力はそんなに素晴らしいエネルギーだと僕は思いつた。せ言わないのが、安全に安定的に電気を供給しているのを、原子力の人にはぜひぜひ言わなさい。

これは判断が分かるというだと思いますが、中立という言葉自体に意味があるというに思われています。この言葉は、どうも考え続けているのです。

いまよくあるのは、専門家と住民の方のやりとりです。公聴会とか討論会だとか。一つの場合、住民の中に賛成したい方も反対したい方もいろいろあると思いますが、専門家は賛成だけで、なんか変な形にならなさい。







す。説明を受けると理解する人はするかも知れないが、それでもイヤというところはある。納得するかどうかだと思います。

早川 女川で十数回、立場を異にする人が共通の話し合いのテーブルについているというところをお聞きしましたが、私はそれはどうもいいことだと思いました。長く続けるのが「レゴ」のよつなよつは

八木 会を始めるにあたって毎回参加して下さるといってお願ひしました。だから十四回は基本的には同じメンバーです。時々欠席される方はいらつしやいますが、ちゃんと話すのレゴ一回一回三時間あつてそれで分かりましたというところは多分ないから、私たちもなんとも来ますから、是非は続けて参加して下さいと頼んだ。長く同じメンバーで続けている良さはありますが、新しく人が入らないというところはありません。それは考えていかなければと思つています。

個人として発言すること

「このよつなよつを長く続けていて何が大事かと考えたとき、会を持ったその時点で分からないうところがいいはある。そのときの東電問題に即して言えば、会合の時点では公式見解はまだ出ていない。しかし、そこにいる人たちは聞きたい、東電でそういうことがあれば、女川でも同じことがないのか聞きたい。

そこに東北電力の人が来ていた場合、その人がどんなに能力があり、やる気があつても、東北電力としては現在調査中といひか言えない。

北村 立場で言えないところがあると行政の人や会社の人か思つてゐることはすくある。彼らは一個人問として立場を離れて発言する習慣はない、組織もそれを許してないと思つて。私は私に「レゴ」のよつなよつをやるしかないと思つてゐる。東京

電力にあつたことは東北電力でもありませんかと問われれば、物議を醸すのは覚悟の上で、その可能性は入りにありますとその場を言つた。

これは何気なく言つたのですが、従来の原子力の専門家を決して言わないメンズですよ。ところが明らかになつて一週間しか経つていなくて、私は新聞報道しか情報がないのですから、推測でものを言つのはある意味で、専門家として自殺行為なのです。それは自分の立場がかわいから言つてゐるのであつて、地元の人が気にしている、本当に知りたいと思つてゐることを、私は私の知る限りのところから、全力でお答えすればそれでいいのです。それだけです。

最近、いろんな取り組みがなされてゐると言つたが、組織の立場を離れて個人として発言するまでの思い切りがあるかどうか、ちょっと分からない。

早川 私も長く役所にいましたが、役所で何かをするには手続きがあります、順番に上司にあげていつ、それでおおやけの見解となる。それが習性になつてゐるので、個人として発言するようにはなつていない。自分一人で踏ん張つてやる人は、全くないとは思はないが、とても少ないと思つて。

八木 行政の人がそんなに軽々しく個人の意見を言つよつになつたら、困ることが多いと思つて、混乱すると思つて意味で。

北村 私は行政の人に言えといつてゐるのでなくて、大学などで働いてゐる人は少なくとも自分の判断で、自分の責任で発言したらいいと思つて。

八木 大学の先生は、そんなふうにしても首にはならないけれど、電力会社の人には首になる。

北村 他の立場の人にはあつてとは言わない、言えないけれど、大学にゐる人には、もつちよつて、世の中に対して、それは賛成でも反対でも推進でもいけれども、率直な意見を言つて欲しい。専門家のなか同士でも、素顔をののすよつな



るのは事実です。政治学、倫理学、哲学、歴史学、美学も、そして神学も、みんな絡んでくゝ話なのです。

原子力をどう思う

八木 せつかなので、皆さんから聞いてみたいことがあるのですが、それは賛成にしろ反対にしろ、それぞれスタートがあると思うのですが、それがどのようなものであるのか、どう思います。

宮本 健 うん、原子力のことですが、放射能は目に見えない、色も形もない、何も感じる事ができないけれども、ものすごい影響力がある。得体の知れない呪いのような塊がそこにあります。とこわれていっちゃうもの、ですから、不安になります。

八木 分からない見えないことが、不安になる。

宮本 健 あなだ、何ともないと言っているけれど、漏れているのではない。とこつ不安。とこつ不安に、疑心は行くと、不安になる。

自分は、そもそも、農業で自分の食糧を自分自身でとっている、鶏を育てるとか、そんなことをずっと目指してきていますから、エネルギーのことも、なるだけ地域の中で自給できるように考えている。とは言っても、人間がたくなっているから、それはやはりいかにないか、と思うけれども、やはりつひはあるのではないか。原子力は人間がそんな制御する術なのかなと思う。もうちょっと待って、一歩手を引いてみたらいい。

宮本 美 敦賀より北の方に住んでいたら、敦賀より南にいくと放射能の針が振れるのだから、なんとなくイヤだ、なとこつイヤメーシがあつた。そんなことを聞いて

たことあつた、本音がこつか分からないけれど、しかし、それで食べられる人もいるのだから、現地のことを知らずに、ああイヤだ、なとこつこつは言えない、なと思つてた。

早川 一 ちうに住むようになつて考えは変わりましたが。

宮本 美 えー、こつちの人は、原発とこつちを合つて長いからか、あまり気にしておられないか、それが不安はこつちが奥の方に追いやつてこつちか、ちうと分からない。

八木 これはこつちで聞いてもさうなんですが、生まれたときからあるの、ま、ま、まわりの山なとこつちであつたおつちやうな方はけこつちおられます。

治部 身内に被曝した人がいけば、美感としてあるのかも知れないけれど、大きな事故が起きてこつちまで放射能が来た、こつちつなこともない、で、大丈夫といふこつち思つち、ちうとした事故はあるけれど。

確かに、原子力発電所は若狭にあつて、都会にはないけれど、こつちだけ多くの金がつりてくる。専門家なり電力会社があつた危険だと思つて、こつちからこつちだけの金が下りてくる。それは危険なものだけれど、大丈夫なようになり、ちうと安全、安全だと思つて、安全だと思つて、安全だと言われれば、安全だと言われれば、危険なものかと思つて、思つても、身体全体で毛嫌いをしてない。もうイヤと毛嫌する人と、別に何も思わない人があると思つち。

有珠山の北海道大学の先生の話がありました、誠実に何回も何回も繰り返して説明されていたら、しかたないと思つたのではない。電力会社のひとが、殻をかぶつて、こつちの議論して説明されるの、こつち先の話のよつちに横に来て、本音がわかつち、やすく説明される、こつちこつちが訴えると言え、それは後の方。単に頭で理解するの、こつちこつちが好む、好まなとこつちこつち、こつちこつち。

だから、電力会社の人も、細かい専門的なことはかりを言いつまり、たゞ言えば  
だけれがその説明からするとたゞの「専門家」は多くありますね。そいつ  
つ質問をしたとき、それは「専門家」を誹っているのですかと問い返せばいい  
それを言わずに「そんなことを問い返すのは悪いかな」ともして「多分こんなこ  
とを質問してはならない」と思いついて答えるので、また「こんなかな」といつ  
にならぬ「専門家」は必ずしも「専門家」ではありません。

決めるのは専門家でなく一般の方々

八木 わたし、感覚して大事だと思っております。原子力のちうなものは「イメ  
ジ」して何となく危ないなと感じるのは、認識として正しい認識でないかと思  
つて、イメージだけではダメだけれど、あんなに危ないのだからみんな安全だ  
安全だと思つたら、だめだと思つたのですが、どうですか。

北村 それは、ある意味で「エース」で、どういついにかどういつい、皆さんが心配  
されるし警戒されるし、専門家から見ればあり得ない「ちうな」ことを質問されて  
も、それはむづかしいだと思つて、それに正対することから始めないで何も始ま  
らないと思つてます。決めるのは専門家でなく社会の皆様ですか。

一九六〇年代頃までは、どんな業界でも専門家が決めてそれを政府の審  
議会や何やらが決定して、動いた時代が「ちう」であつた。だから、薬害オゾのよ  
うな問題が起つた。技術に対して肯定して、専門家の決定で動いてきたけ  
れど、「ちう」の「ちう」は原子力の人は誤解しているもので、いついまでも「ちう」であつては  
ならぬ。決めるのは一般の方々なので、それは理解は浅いかも知れない。

しかし「一生懸命話しているのを聞いて、ちうなことをいふのがあればそれは悔まれる  
に、仮に科学的に判断が違つてもいいやないですが、主人は一般の市民住  
民なものですから。」これからは「ちう」の方を、原子力の人を腹を据えて、「ちう」  
の時代だと思わなければいけない、思つてます。

おしよの「ちう」一般の方も大変なので、専門家が決めてくれた過去の方が楽だ  
といつて思つた方が「ちう」だ。一生懸命に自分の生活を守つて、反対運動  
をされているのも、「ちう」だ。でもみんなが「ちう」でないのも、「ちう」だからわれわ  
れはまだ本心に正対に行く道を見つけて切つてはいない。ただ少なくとも本音で  
やるとか、質問に対して誠心誠意答へるとか、専門家に本気で「バトル」する  
か、どういついよは「ちう」で進んで行くための大事な一歩であると思つてます。

われわれは「ちう」に「ちう」に「ちう」だから「ちう」だといつて「ちう」な  
「ちう」の「ちう」は、多く考えていなく、こんな「ちう」に「ちう」が、いかに  
いかにこの現状です。また道は見つかつていません。

話し合ひを続けることについて

八木 さっき原子炉の安全のことがありましたが、五重の壁があるから安全だとい  
つて、「ちう」も、あんなもの作らなければいけないほど危険だと、「ちう」の「ちう」を違  
つて「ちう」で見ているのですが、六ヶ所や女川で反対派の人たちと話して、「ちう」反対  
派の人が言われたのは、原子力施設は「ちう」も、厳重だ、入るのがとても難しい。何  
重も「チクゲート」がある。一方、賛成派の人には、だから安全なのでないです  
か。同じものを見ても全く違つた「ちう」を思つて思つた。

「ちう」の「ちう」で、原子力が「ちう」か「ちう」か「ちう」か「ちう」か「ちう」

して話していただき、発電所ができて道路ができて二反面、工用車のトラックなどがたくさん入って交通事故が増えていると反対の人が言われたが、いやそれでなく交通事故は減っていると全く違う意見がでた。価値観とか判断ではなくて事実認識が違うところがあった。それはよくよく聞くように増えているところや減っているところがある。交通事故が増えているところと減っているところがある。何が減っているのか増えているのか。それがないとわからない。

見ているものが同じでも違う意見になったり、そもそも違うものをめたくも同じものを見ているところがある。あつぱつぱつを言っているところがある。議論はあつぱつぱつである。

北村 そのうち北村、やはり自分の見解に有利な方の見解を見る、見たものをみる。だから、そのときの例を言っていると、推進の方は死にゼロがずっと減っていると言っていると反対の方は事故件数が増えていっていると。それはやはり両方見た上で議論をするので、その違いを繰り返していると、今、北村、やはりもう重々理解してあげよう。

八木 今ではそういうことは問題ではなくなっていますが、確かにいままでは推進派はつねづねかり言っていることに思っていますが、実際はなるほどない。

安全が安全でないかという議論をしようとするだけではない、実はそれだけでなくて都会の人にもっと考えて欲しいという話を僕は言っているのだとか、言われる。昔は地域の中で何でも話せたのに、電力が来たおかげで、なにも話せなくなっている、それがイヤなのだとか。原子力の話は安全か否かに集約されるのだけれど、本当はそれだけでないのかなという話もある。

早川 それほどよく分かる、安全が安全でないかを切り口に、その後の伝え

たいことがいぼいぼある。安全か否かの議論は何かを伝えるための手続きになっている。それがないと伝えたい後輩のことがうまく伝えられないから、安全か否かの議論をする。だから、取り上げて聞くべきことはその後ろにある伝えたいことなので、それが分からないと表のことでたまきされてけんかになってしまふ。

分かり易いからけんかになるので、本当は違うと思う。なにを伝えたいか、その裡のことを理解しても飲み寄れないかも知れないが、その何かは互いにわかまなければならぬと思う。安全問題は核心的な問題ではあるけれど、原子力のことはどうでも広い背景を持った問題なので、安全論争だけでは収まりきれない。

過去に拘泥しないというルール

八木 いろんなところでお話を伺っていると、やはり今現在の状況の話をしようというので、あると将来の話をしようというので、それで今議論を進めよう、じゃあ過去の経緯はもういじつたからいいよ、過去の話を聞いておけ。十年前は村を二分する大きな話題があったので、話が戻って来ます。それを切り離すのは難しいので、過去の経緯はもういじつたからいいよ、今ある話、今ある話、今ある話。それで、過去の経緯はもういじつたからいいよ、今ある話、今ある話、今ある話。それから先の話は、だから考えなければならぬと思えます。

部外者として思うのは、過去には地したものは、それは否定的に扱ってはならない。今の私達から見て、あんなのを立地したから、今、あんなに真

の遺産が残った」と言われると、その当時がなほ「このなな」を話し言われた人も違う想いがあると思うので、今から批判するのはとても簡単だけれど、それはしてはいけないのではないかと。

女川などを話してと言われたのですが、小さい子供さんを持っていらっしゃるお父さんなんか、原子力発電は百年は持たない、将来なくすか建て直すかするときに、親父たちの世代でちゃんと話し合っとなかったのだからいま「このなな」が起つてしまった子供は、言われたくないと言われた。

もう一つ別ののですが、ム物行政は怒られますね、発電所が来て、それで体育館を作ったけれどあれはそれほしくない、公民館も作ったけれどいらぬとこのななをよく聞かれます。

話を聞いていて難しと思うのは、「これは福島で聞いたことですが、七〇歳くらいの方が、いま使いたくない体育館を建ててと批判を聞くと本当だなと私も思う、でも二十年前は欲しかったのだ」と言われた。当時木造の建物しかなかった、出稼ぎもとても多かった、父親が東京に出てそのまま行方不明になって離婚した話もいっぱいあった、そのとき、発電所ができたら出稼ぎもなくなってよくなる、と聞いてすぐくはくはかたし、すぐく嬉しかった、役場も隣の町にできたのなら、うちもコンクリート建てのがいいと思って、発電所が来たときほくても嬉しかったと言われた。浅はかだったかも知れないけれど、すぐく嬉しかったのだよといわれた。

それは安全かどうかわからない、別のウソの話のこと、いや、でもおもしろいとかなく思った。危険と「このなな」今の時点で全部を否定するのは間違っているかと思えました。

早川 その場合、誘致した人がいま非難されるのが問題だと「このなな」を言っ

ていますか。

八木 その通り、誘致した「このなな」を今から振り返り、非難するのはしょうがない、しょうがないと言いつつ切つてしまつて語弊があるかもしれない。

早川 誘致した人の責任にしてはいけない、このことを八木さんは言っているのですか。

八木 はい、その通りです。良くも悪くも、原子力発電所の誘致「このなな」は大きな影響を与える出来事です。

北村 ポイントは、議論は未来に向かつていなければならぬ「このなな」です。未来に向かつて議論しなければならないけれど、しかし、そのとき、過去の怨念が、しょうごうの吹き出しである、それは心持ち、この半分は分かるけれど、議論のあり方としては、過去の「なな」は互いに向つて、ま、それは触らない「このなな」議論しない、このように情緒的に流れる。

人間の心は大事に閉じめてあるものがある、それを開いたら、修羅の道ではないが、えらいことになる。僕は人間の理性がそれほど優れているとは思っていない。「ナトリウム」じゃない危ないのが人間だと思つて、「このなな」の意味、約束として、たうえ言いたうえは、あつても、過去は言わない「このなな」議論した方がいい。

早川 それは無視する「このなな」は違ひますね、意志的に伏せておく努力をする「なな」、それは昔はなかった「このなな」の「このなな」は違ひ。

北村 言いつては、危ない「このなな」は、あつても、今の議論の文脈では、ただ、これは言いつておきたい「このなな」が、あつても、いいこと。

八木 地域に与えた影響と長い時間が、原子力について話して、「このなな」に難し「このなな」。







るなりのなにもあるのですがそれを東京などへ話すと、それは妄想だろついな  
どつにわたる。しかし住んでいたら、その思われるのは分かるのです。聞けば伝  
えなければと思うし、伝えるのも聞く聞かなければと思う。その循環で私は  
まじまじもつてきたのかな、といつかを今日また実感した次第です。

北村「この頃は専門家責任といつことをすく重く感じています。僕は狭い範  
囲の専門家ですが、幸い哲学系の友人も倫理の友人もいて、多少、多分、普通の  
狭い範囲の自然科学の専門家よりは目を開かされた面もあるだろうと思ってい  
ます、大変僭越な言い方ですけど」

私はそのついでに、地域の方に語りかけ、もしそんな意味で不安をもつ  
ておられるより、いざが手助けできる事柄があれば、それは忘れて下さって  
いただきます。このついでにも責任だけども、行政の方や電力事業者の方に、あなた方  
がもし語るなら、もしこのついでに語ってもらいたいです。今語ってもらっ  
ているのは、申し訳ないけれど、的はずれです。そのついでを知ってしまった  
人間は、発信する責任があるし、僕は八木さんと少し方向は違って、僕が発信す  
るのは行政も含めた専門家集団であると思っております。このついでに専門家集団の中  
に、まさに、霞ヶ関の中や東京のなんかビルの中にいて、現場をあまり知らな  
い人が、意志決定や方針を決めているのなら、それは地域の人にとって不幸だし、  
日本の国民にとっても幸せなことでない。その人たちに聞いたことを戻す、フィ  
ードバックをするのが僕の仕事だと思っております。

だから「ここに来て、いろいろ聞かせていただくことも、同じ文脈の中の話であ  
りて、直ぐに何かできることについては約束できないけれども、行政を動かすこ  
か、学会を動かすとか、人を動かすとかは、その簡単なことではないです。なか  
なか人は動きません」

専門家集団に、世の中はいつなのだから、一般の方はこんなことが不安で懸念を  
持っているのだよと話をするのが、私が一番重点を置くべき仕事かなと思っ  
ています。私はこのついでには発信ではなく受信しているつもりです。「この受信  
したことを専門家集団に発信したいと思っております。このついでを持って頂いた  
こと」に感謝しております。

## 資料

### 一 講師

北村正晴（東北大学、名誉教授）、八木絵香（大阪大学、特任講師）

### 二 日時、場所

平成十八年二月十八日、名田庄村山村開発センター

### 三 参加者

司会、早川博信（名田庄村村二重）

治部ひろみ（同村虫鹿野）、宮本健作（同村納田終）、宮本美希恵（同